

伊藤外科ニュース



101号

2012.12 発行

発行日変更のお知らせ

いよいよ師走となり、木枯らしが本格的な冬の到来を告げていますが、皆さんはいかがお過ごしですか？

当初伊藤外科ニュースは、月初めに発行する用意をしていました。しかし、月末月初めは街医者も行政からの書類の山と格闘しているのです、今回から月中旬の発行となります。

入院なさった方は、様々な治療を受ける際に署名する書類の多さに異常さを感じた事と思います。同様に、医療者側からみても処理しなければならない書類の多さはここ数年で急に増えました。書類業務で医療の質がアップされたとはとても思えずかえって形式的になっているようで不安です。

大腸がん検診

さて、今回は、大腸がん検診について少々。

各自治体や保険組合では健康診断と同時にがん検診の一環として大腸がん検診を行っています。大腸の病気は日本人の食事の欧米化によって急増し、特に大腸がんは女性のがん死亡率の一位となっています。

一方で、大腸がんの一次検診は簡単です。無症状でも大腸病の患者さんの便にはごく微量の血が混在する事が多いので、化学反応検査で血便を判定します。

判定が陽性の方は精密検査(二次検査)としての大腸内視鏡検査を受けて病気の有無を検討します。二次検査で見つかる疾患で多いのは、大腸ポリープです。

ポリープは、粘膜から隆起したものの総称で悪性を意味する言葉ではありません。ポリープの直径が1センチを超えるものに対しては、内視鏡による治療を行う場合が一般的です。勿論、検査で大腸がんが発見された際には内視鏡的治療、腹腔鏡手術、開腹手術などが病気の進行度によって行われます。

いずれにしても、治療の進歩は素晴らしくまた早期のがんであればある程その恩恵をより受けることが可能です。皆さんも定期的到大腸がん検診を受けてください。

私は、今年はよくゴルフ場に行きました。お蔭で楽しい仲間がたくさんできました。春には桜を、秋には紅葉をプレーしながら楽しみました。

若い頃のように強い負荷がかかる運動はできませんが、なるべく長い距離を歩くようにしています。寒い日が続きますが、皆さんも風邪を引かずに元気で年末を過ごしてください。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーは HP にて公開中です)

三弓先生の本棚 27



文藝春秋 創刊 80 周年記念

インターネットの本屋さん「Amazon」から電子書籍リーダー「Kindle」が発売された。電子書籍リーダーというのは、持ち運びできる小型のパソコン形のもので、電子書籍を読むことに主眼を置いた端末機械だ。「本は紙の時代からデジタルへ」といわれて数年経つが、出版社各社の反発もあり、電子書籍リーダーの重要はあまり延びていないようだった。「Amazonが発売したら、買おうかと思っている」、こんな声をまわりでもよく耳にした。

そんなわけで、私も「Kindle」の発売で、そろそろ電子書籍にも手を出してみようかなあ……と思っていたが、いまだもって発売している電子書籍（「Kindle」などの端末機で読める、紙ではなくデジタルの書籍）は著作権の切れた夏目漱石や芥川竜之介といった時代の作家のものか、新刊の一部のようだ。じゃ、まだいいか。

そもそも、このところ私は、新刊どころか、古書店にお世話になることが多い。最近、買った本を振り返ってみると、『音楽の考古学』やら『日本民俗大系』やら、多くが昭和の刊行物。しかも、著作権が切れても、電子化してもらえそうもないものばかりだ。

小説にしろ、歴史書にしろ、生活情報にしろ、本はその時代を反映する。三弓の本棚をあさる楽しみもそこにある。特に雑誌は時代の顔がそのまま見えておもしろい。月刊『文藝春秋』を長く愛読していた三弓は、折々の特別号だけはしっかりと、本棚に残しておいてくれた。

今月、手に取って見たのは『文藝春秋』創刊 80 周年記念号。10 年前、2002 年 2 月特別号だ。2002 年は、物理学者の小柴昌俊氏と島津製作所の田中耕一氏、2 名の日本人ノーベル賞受賞者が出た年である。比較的穏やかな年だったかもしれない。記念号のメインの特集は「80 人の心に残る鮮やかな日本人」。瀬戸内寂聴が岡本かの子を、梅原猛が川端康成を、柳田邦男が土門拳を挙げている。「心に残る」とされている日本人の大半は鬼籍の方々だが、寄稿している人は当然、お元気。その顔ぶれも、10 年経つとずいぶん懐かしい方々になってしまったなあ。

『文藝春秋』のグラビアの定番、「日本の顔」では、各界の第一線で活躍する人々を取り上げているが、普段なかなか見せない顔をカメラマンがうまく捉えている。80 周年記念ということで、昭和 40 年以降のものが再掲載されていた。女学生におねだりする志賀直哉、通勤バスに揺られる三笠宮崇仁、三社祭の喧騒の中でぼう然と立つ金子光晴……、背景の時代の空気も含めて興味深いページだ。

今晚、布団のなかで読むのを愉しみにしているのは、司馬遼太郎夫人の福田みどり氏と田辺聖子氏の対談企画「親交 40 年、いま語り明かす素顔の司馬遼太郎」。この号が出たとき、すでに司馬遼太郎氏没後 6 年もたっていたんだなあ。

雑誌はけっこうパッパと資源ゴミに出してしまうほうなのだが、10 年、20 年、30 年と経った雑誌はいろんな意味で拾い物があっっておもしろい。 (一弓)